

## 中世室町期における四段動詞の下二段派生

青木, 博史  
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/9427>

---

出版情報 : 語文研究. 79, pp.1-13, 1995-06-04. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 中世室町期における四段動詞の下二段派生

青木博史

## 1. 問題の所在

抄物資料には次のような動詞がしばしば現れる。

- 此マデハ韻カ三句ニフメタソ (史記抄・四35オ3)
- 秘セラル、ホトニ何タルコトヲカケタトモ不知ソ (同・八25ウ2)
- 叢林ニハワイトヨムルカ、コチニハクワイトヨムソ (蒙求抄・一54オ10)
- 先達ノヨメタハカウソ、サレトモ注カナイ程ニ (毛詩抄・十二28オ16)
- 後漢ノ事ナラハ光武ノイエタ事ソ (玉塵抄・一18・1)
- アノ如ク女天子デアッタソ、天ドヲ二十一年モテタソ (同・二151・10)

これらの動詞は前代には見られなかったものであり、踏む・書く・読む・云う・持つなどの四段動詞から新しく派生してできた動詞であると考えられる。

これらの新たに派生した動詞群について、その存在を一番早く指摘したのは湯沢(1929)であろうと思う。湯沢は抄物資料の例を示しながら、そこに可能・受身・尊敬の用法があることを説いている。その後、鈴木(1972)・柳田(1974)は「周易抄」・「中興禅林風月集抄」から、上の湯沢が指摘する動詞と類似の例を示した。この後、初めてこの現象を正面から取り上げて論じたものに、村上(1976)がある。ここでは玉塵抄と詩学大成抄を資料としてかなり詳しい考察がなされているが、この動詞を尊敬語とみなしており、その尊敬用法の分析のみに終始してしまっている感がある。また山田(1994)においてもこの動詞について言及があるが、ここでもその尊敬用法についてしか触れられていない。その一方で、「ヨムル」等の形は現在の可能動詞に通ずるものであることから、可能動詞研究の中でこの動詞が取り上げられることがあるが(坂梨1969, 渋谷1993)、いずれも可能表現体系の中でしか捉えられていないようである。

以上、先行研究を通観すると、本質的な部分については何ら明らかにされていないと言ってよいだろうと思う。湯沢によって可能・受身・尊敬の用法が指摘されながら、その後の研究では、尊敬用法のみ、あるいは可能用法のみというように別々に研究がなされている。この派生現象がどのような性格のものなのか、一度これを統合的に論じてみる必要があるように思う。

## 2. 四段対下二段の自他対応形式とその展開

この「ヨムル」「カクル」について、ひとまず先行説によって確認しておく、「四段動詞を下二段へと活用を変えた」ものであり、「可能・受身・尊敬等の意を表現する」ものであるということになる。そうすると、前代にもわずかではあるがこの条件に合致しそうなものが見られる。

●軍兵共五百餘人、一人モ不残壓ニウテ、死ニケリ (太平記巻第十三)

●あはれ、世にもあひ、年などもわかくて、みめもよき人にこそあんめれ、式にうてけるにか、此鳥は式神にこそありけれ (宇治拾遺物語・巻二ノ八)

これは四段動詞「打つ」が下二段へと形を変え、「打たれる」という受身のような意味を表したものと考えられる。<sup>(1)</sup>このように言う時、さらに前の時代から存する「四段他動詞に対応する下二段自動詞」は、下二段「打つ」と同じ性格を有しているかのように見える。例えば、次のような「知る」という語であるが、四段に活用するときは

あすかがはしたにごれるを之良受思天(しらずして) (萬葉集巻十四・3544)  
のように、他動詞としての用法である。しかし、これが下二段に活用するときは、

人不知(ひとしれず)もとなぞこふるいきのをにして (萬葉集巻十三・3255)  
のように、自動詞として受身的な意味を表すのである。<sup>(2)</sup>

この四段対下二段の自他対応形式については、どちらが「派生」形であるのかは明らかではない。<sup>(3)</sup>例えば、「まぐ(曲)―まがる」「かる(枯)―からす」の対応に関しては、「まぐ」から「まがる」が、「かる」から「からす」がそれぞれ派生したのであろうと言われている。今、このようにして自動詞を派生させることを「自動詞化」、他動詞を派生させることを「他動詞化」と呼ぼう。そして、自動詞化、他動詞化を成立させる形式(上の例では語幹増加と語尾付接によるもの)を「自動詞化形式」「他動詞化形式」と呼ぼう。この言い方にならうと、下二段「知る」は「自動詞化」によって生じたかどうかは判定し難い、ということになる。つまり、先の下二段「打つ」は四段動詞から「派生」したと言えるが、下二段「知る」は「派生」とは言えないのである。ここに両者の基本的な違いがありそうであるが、この二つの間には何らかの関わりがあるのではないかと考えられるだろう。

通時的観点からみた自他動詞の対応については、釘貫(1990)(1991)に詳しい。今これに拠れば、上代語の自他対応形式は、次の3つに分けられるという。

### (I) 活用の種類の違いによるもの

うく(浮) 四自―うく下二他

きる(切) 四他―きる下二自

### (II) 語尾の種類の違いによるもの

なる(成) 自―なす他

うつる(移) 自―うつす他

### (Ⅲ) 語幹増加と語尾付接によるもの

かる(枯) 自一からす他

まぐ(曲) 他一まがる自

このうち、四段他動詞対下二段自動詞の対応形式は第Ⅰ群形式に属するのであるが、この形式は広く行われなかったものである。このことについて釘貫は、活用の違いに基づく第Ⅰ群形式は、いずれが自動詞でいずれが他動詞であるかはそれぞれの語で個別に決まっており、自他いずれの情報も積極的に表示していないところに問題があったと述べている。そしてその後自他対応形式は、自他弁別の要求の増大に対応して、活用の種類の違いのみに基づく消極的なものから、「ル」「ス」という積極的な標識を用いた形式へと転換を遂げたのではないかと釘貫は推測している。しかしながら、この時点でひとつの留意すべき事実がある。それは、全ての語が対応する自動詞、あるいは他動詞を持ったわけではないということである。なぜ、あらゆる語がそれぞれ自他の形で対応する語を持つことがなかったのだろうか。

この理由のひとつとしては、助動詞「る・らる」「す・さす」の発達ということが考えられる。一種の「自動化形式」である「る・らる」、他動化形式である「す・さす」<sup>(4)</sup>を用いることによって自動詞化、他動詞化が可能になったため、動詞自体の形態論的整備が完成しないで終わったということが考えられるのである。しかし、対応する自他動詞を持たない動詞は、やはりそれぞれの対応語を求めようとしたのではないだろうか。そして、ここに組織的な形態論的対立をもつ、四段と下二段という活用の種類の関わりを適用したのではないだろうかと考えたいのである。四段活用と下二段活用の動詞は、上代語動詞の大部分をカバーする一般的、普遍的なカタチである。未完成の自他対応形式がその不備を補おうとする力は、この四段対下二段という組織的な形態論的対立を用いることによって始めて、その欲求を満たすことができるのではないだろうか。

先に挙げた下二段「打つ」は、このような力の一つの現れとして、四段他動詞に対応する自動詞として新しく作り出された語なのではないかと考えられる。すなわち、四段動詞を下二段へと活用を変えるという新しい「自動詞化形式」が生まれたと考えられるのではないだろうか。このような語は「打つ」という1語に限ったことではあるが、室町期に数多く見られる「ヨムル」等の語とほぼ性格を等しくするものである。したがって、室町期におこった現象と何らかの関わりがあるという可能性は十分に考えられるように思う。<sup>(7)</sup>

### 3. 室町期における四段動詞の下二段派生

まずは、抄物資料に現れる例について整理したものを呈示しておく。史記抄・蒙求抄・毛詩抄・玉塵抄・詩学大成抄の5つの抄物について、用例数と異なり語数とをまとめて表にしたものを、〈表1〉として次に掲げることとする。<sup>(8)</sup>

〈表1〉

	史記	蒙求	毛詩	玉塵	詩学	計
用例数	8	9	6	302	132	457
異なり語数	4	1	1	18	14	24

〈表1〉から指摘できることは次の三点である。

- ①抄物資料においては頻繁に見られるものである<sup>(9)</sup>
- ②異なり語数が非常に少ない
- ③史記抄・蒙求抄・毛詩抄などのいわゆる「前期抄物」と、玉塵抄・詩学大成抄などの「後期抄物」の間に格差が見られる

「ヨムル」「カクル」の成立を考えるにあたって重要であると考えられるのは、異なり語数が非常に少ないということである。つまりこの現象は、限られた語において起こる現象なのではないかと考えられるのである。

〈表1〉に、村上(1976)で報告されたものも加えると、具体的な動詞は次に挙げる26語になる。

書く 説く 置く 歩く 薫(タ)く 弾(ヒ)く 移す 言い直す 持つ  
 読む 踏む 詠む 云う 問う 思う 歌う 食う 嫌う 占う  
 作る 語る 成る 回る 濁る そなわる 立ち寄る

これらの語は次のように分類した時、著しい傾向のあることが分かる。それが次ページに掲げる〈表2〉である。動詞は元の四段の形で示すこととし、これに用例数を加えて示すこととした。

〈表2〉を見ると明らかなように、生成される四段動詞の大部分がIに偏っていることが分かると思う。これに用例数を加えて見てみるとさらに明らかなのであって、IからIVに属する動詞の用例数と異なり語数をまとめたものを、〈表3〉として次に掲げておくこととする。また、Iに属する語である「読む」という語は178例、「云う」という語は155例も数えることができるのに対して、II III IVの語は「成る」を除いて、1語につき1例ずつしかないという特徴も指摘することができる。さらに前期抄物と後期抄物に分けて見てみると、前期抄物の例は全てIの語であることが見てとれるのに対し、II III IVの語は後期抄物からしか見ることができないのである。つまり、この現象はIの語から始まったということが言えるだろうと思う。

〈表2〉

		史記	蒙求	毛詩	玉塵	詩学	計
I	読む	5	9	6	92	66	178
	云う				140	15	155
	書く	1			21	16	38
	説く				13	13	26
	作る				9	12	21
	置く	1			2	2	5
	持つ				4	1	5
	問う				5		5
	思う				2	1	3
	歌(詠)う				2		2
	語る				2		2
	食う				2		2
	踏む	1					1
	嫌う				1		1
	占う				1		1
	薫(ク)く				1		1
	弾(ヒ)く				1		1
云い直す				1		1	
詠む					1	1	
II	移す				1		1
III	歩く					1	1
	立ち寄る					1	1
IV	成る				2	1	3
	回る				1		1
	濁る					1	1
	そなわる					1	1

I……対応する自動詞を持たない他動詞

II……対応する自動詞を持つ他動詞

III……対応する他動詞を持たない自動詞

IV……対応する他動詞を持つ自動詞

〈表3〉

	用例数	異なり語数
無対他動詞 (I)	449	19
有対他動詞 (II)	1	1
無対他動詞 (III)	2	2
有対自動詞 (IV)	6	4

以上のように、「対応する自動詞をもたない他動詞」にこの現象がもっとも起こりやすいということが分かった。そうするとこの現象は、前代に見られた、四段動詞を下二段へと活用を変えるという語法と全く同じものではないかと考えることができそうである。すなわち、四段他動詞対下二段自動詞という自他対応形式をもとに、対応する自動詞をもたない四段他動詞が、形態的にその不備を補う形で下二段へと活用を変えるという、一種の体系化による「自動詞化形式」である、と考えることができるように思う。

鎌倉期までは散発的にしか見られなかったこの現象が、かなり広く行われるようになったのがこの室町期であると考えられる。そして、前期抄物と後期抄物とでは用例数・異なり語数ともに大きな相違があったことを先に指摘しておいたが、これは時代に伴って後期になると異なり語数を増やしたために、用例数も増加したのではないかと考えられるのである。つまり、前期抄物における様相は前代の語法をほぼ引き継いだものであって、「対応する自動詞をもたない他動詞」のみからしか下二段動詞は派生されなかったのだが、徐々にその制限がゆるみ、その他の動詞からも派生することが可能になって用例数を増やしていったのだと考えられよう。そして、このように語のバリエーションが増えていったということは、この派生法が確立していったためであると考えられるのである。

以上の結論は、主として抄物資料を扱って得た結論である。狂言資料や、天草版平家物語・伊曾保物語等にはこの現象がほとんど見出されないのであって、抄物特有の語ではないかといったことも考えられないではない。しかしながら、キリシタン資料でも、辞書的性格をもつロドリゲス日本大文典や日葡辞書にはその記述が見られる。まず、ロドリゲス日本大文典では以下のように、抄物資料にみられる「読む」「書く」等の語を見ることができる。

○絶対、又は、規定中性動詞は、〈中略〉 能動動詞から派生するものである。

○これらの動詞に二種あることは注意を要する。その一つは寧ろ受動動詞に傾いてみて、第二種活用の能動動詞から作られるものである。それらはある可能性を持つことを意味する。例へば、Quiqu (聞く) から Quique, Quiquru (聞け、聞くる),

Yomu (読む) から Yomuru (読むる), Quiru (切る) から Quiruru (切るる),  
Toru (取る) から Toruru (取るる), Xiru (知る) から Xiruru (知るる) が作ら  
れる。 (269 ~ 270 ペ)

○第二種活用の動詞から作られた中性動詞, 例へば, Yometa (読めた), Caqueta (書  
けた), Quireta (切れた), Toreta (取れた) 等はそれ自身になされるといふ意の受  
身を意味するのであって, 格語をとらない。 (377 ペ)

また, 日葡辞書にも, 「読むる」「もつる」の二語が記載されている。

- Yome, uru, eta. ヨメ, ムル, メタ (読め, むる, めた) 文書なり文字なりが読み  
とれる。例. Ano fitono teua yô yomuru. (あの人の手はよう読むる) あの人の書  
いた文字は読みやすい。
- Mote, tsuru, eta. モテ, ツル, テタ (もて, つる, てた) 保たれる, 支えられる。  
例. Xiroga motsuru. (城がもつる) 包囲されている城が, 降伏しないでよく持ち  
こたえている。

以上のような記述があることから, 「ヨムル」等の動詞は室町期においてある程度広く用  
いられていたと考えてよいのではないかと思う。したがって, この派生現象を中世室町期  
における「四段動詞の下二段派生」と呼ぶこととしたいと思う。

#### 4. 意味用法についての検討

「四段動詞の下二段派生」は, 一種の自動詞化形式として成立したものである。したがっ  
て, 派生してできた下二段動詞は, 自動詞の延長上にある可能・受身・尊敬を表すことが  
できる。これは, 助動詞「る・らる」が自動詞の活用語尾から分出され, 可能・受身・尊  
敬を表すことと同じ状況が考えられる。

これらの意味が互いに変わりやすいことも, 助動詞「る・らる」の場合と同様である。

- 1 此マテハ韻カ三句ニフメタソ (史記・四 35 オ 3)
- 2 秘セラルホトニ何タル事ヲカケタトモ不知ソ (同・八 25 ウ 2)
- 3 叢林ニハホワイトヨムルカコチニハクワイトヨムソ (蒙求・五 33 オ 9)

上に挙げた 1 から 3 の例は, 可能・受身・尊敬のどの意味にもとれそうである。これにつ  
いて渋谷 (1993) では問題とされているが, 坂梨 (1994) も述べるように, さほど重要な  
問題とも思えない。これらの意味は文脈によって判断すればよいであろうと思う。<sup>(10)</sup>

- 4 上聲ニモ去聲ニモ成ト見ヘタソ, 此テハ今ハヨメヌソ (史記・十四 76 オ 2)
- 5 乃請日丞相御史言上ノ日字カヨメヌソ, 由字テハシアル歟ソ, サナウテハチツト  
モヨメヌソ (同・十五 5 オ 9)
- 6 中テアラウスカ此テ中トハヨメヌソ (同・十五 31 オ 10)
- 7 得ノ字カナケレハ心得ラレヌ, ヨメヌソ (蒙求・二 54 オ 7)



- 8 漆ヨメヌ字ソ、シツシヨヨリトハヨミニクイソ (毛詩・一〇27ウ12)

上の4から8の例は、いずれも可能として解釈できる。このように可能な意味で解釈できる場合は、後に否定の「ヌ」を伴う場合が多い。可能表現が否定表現の中で多く用いられることはこれまでも指摘されていることであるが(渋谷1993など)、この動詞においてもこの事実を確認することができる。<sup>(1)</sup>

また、次のように尊敬すべき人が動作主である場合は、尊敬用法として解釈できる。

- 9 モト人ノヨメタ下風ハ我ソ、鄒陽カコトソ (蒙求・一54オ9)

- 10 人ノヨメテ候ニ遠ハ二十年三十年前ノ事ヲ知ト読テ候カ (同・二63オ9)

- 11 先達ノヨメタハカウソ、サレトモ注カナイ程ニ (毛詩・十二28オ16)

9から11の動作主である「人」「先達」は、いずれも禅僧を指すと考えられ、これに対する尊敬用法であると考えられる。そうすると、次のような例は動作主が明示されていないが、「人」という動作主を想定して尊敬用法として解釈できそうである。

- 12 高ト云ハ呉王ノ行ソトヨメタカ (蒙求・一54オ10)

- 13 両ノ足ヲキラレテハ何かイキラレウソ、足ノスチヲキル事チヤトヨメテ候ソ  
(同・二40オ5)

- 14 夫ハ我ヲ戒メ女ハ汝カ禁メタトヨメテ候カ (毛詩・四29ウ10)

以上前期抄物の意味用法をみてきたのだが、「可能・受身・尊敬」と、文脈に応じて色々な意味にとれるものがあることが分かる。それでは、後期抄物ではどうだろうか。

- 15 後漢ノ事ナラハ光武ノイエタ事ソ (玉塵・一18・1)

- 16 大般若ノ序ハ太宗ノカケタソ (同・一50・1)

- 17 機ト理トノニ契(カノウ)ホドニ仏ノトケタ一切ノ経ヲ総名ニ契(カイ)ノ経ト云ソ  
(同・一70・7)

- 18 横川ヲ信シサシマシタトアリ、梅雲ノ予ニカタレタソ (同・二170・10)

- 19 又堯ノ舜ニ天下ヲユツル時ニ天(ノ)曆数(スウ)在(リ)ニ汝躬(ニ)トイエタソ  
(同・二243・5)

- 20 遺(ノ)此(ノ)一老(ヲ)ト孔子ノイエタ語ノ心ソ (同・四466・13)

- 21 長楽ハ漢ノ高祖ノツクレタダイリノ中ノ宮ナリ (同・五548・5)

- 22 達摩カラ第四番メノ四祖道信大師ノイエタソ (同・六28・13)

- 23 迦維(イ)ト真乗ハヨメタソ、ツネハ維ハ経ニハユイトヨムソ (同・九552・5)

- 24 仏ノ法華経ヲトケタ仏法ノ味ヲ如(シ)ニ天甘露(ノ)ト六巻トケタソ  
(詩学・一50ウ12)

- 25 天隱和尚ノ亭(チン)ノ額(ガク)ニ遊目(ボク)ト自筆ニカケタソ (同・七2ウ8)

- 26 月舟ノ史記ノ談義ニハキウタセストヨメタソ (同・八15オ11)

これらの用例と、1から14までで挙げた前期抄物の用例を比べてみると、動詞の動作主

にあたるものが大きく異なっていることが分かる。1 から 14 の用例では、動詞の動作主にあたるものは抄者自身であるか、あるいは動作主が不明確なものばかりであった。ところがここでは、先には見られなかった、光武・太宗・仏といった具体的な人物が動作主となっているものばかりなのである。

このような後期抄物の例は、これらの人物が全て尊敬すべき人物であるために尊敬用法であるとされ、その解釈は一致している（柳田 1974, 村上 1976）。玉塵抄と詩学大成抄を調査対象とした村上は、この動詞がどのような人物に対して用いられているのかについて調査し、それらの人物にはいずれも尊敬語が用いられていると述べている。また、次に掲げるように、ロドリゲス大文典にも尊敬用法についての記述がある。

○同輩とか少しく目下に当る者とかでそこに居ない者に就いて話す場合、又従属関係はないが尊敬すべき人でそこに居ない人に就いて話す場合には、Yomareta（読まれた）、Cacaruru（書かるる）、Mōsaruru（申さるる）などの如く、与え得る最低の敬意を示す Raruru（らるる）を使ふか、Xineta（死ねた）、Xinaximatta（死なしまった）などを使ふかする。（600 ペ）

このように、後期抄物になると「尊敬」用法へと偏りを見せるようになったという、意味変化を見てとることができるのである。「四段動詞の下二段派生」とは、その初期段階においては、対応する自動詞をもたない他動詞においてのみ起こる現象であった。これが後期抄物になると、「対応する自動詞をもたない他動詞」以外からも派生するようになっていたのである。つまり、ここにおいて四段動詞から下二段動詞を派生させることは、自動詞化形式というよりは「尊敬」を表すものへと意識が変化していたのではないかと考えられるのである。

次に挙げるものは「対応する自動詞をもたない他動詞」以外から派生した例であるが、いずれも尊敬用法として解釈できる。このように派生の「原則」から外れたものが見られるのは、「尊敬」という型ができあがっていたことを示すのではないかと考えられる。<sup>(13)</sup>

- 27 夏ノ禹ノ洪水ヲ九年ノアイタヲサメテ九州ヲマワレタソ （玉塵・三 313・12）  
 28 阿難二十五ノトシ仏ノ侍者ニナレタソ （同・十 630・4）  
 29 東福ハ徑山寺ヲナニモ聖一ノウツセタソ （同・三三 236・13）  
 30 穆一ハ天下ヲメクリアルケタソ （詩学・二 44 オ 2）  
 31 マコトニ太祖ノ王位ニソナワリテヨリ十六番メノ王幼(ヨウ)ノ帝ノ四歳ニシテ王位ニソナワレタソ （同・九 19 オ 1）  
 32 秦ノ始皇ノ泰山ヘ封禪ノマツリヲナサル、時ニ俄ニ大雨ガフルホドニ大ナ松ノ木ノモトエ立ヨレタレバ （同・九 54 ウ 8）  
 33 笏(コッ)ノ室ト笏ヲニゴレタソ、総シテ笏ト一字云フ時ハスムホトニ （同・十 18 ウ 9）

以上のように、前期抄物では「可能・受身・尊敬」と色々な意味にとれるものが存したが、後期抄物になると尊敬表現へ意味用法が収斂していったという変化があったことが分かる。このようにごく短期間のうちに意味変化があったという不安定さは、中世の新しい発生であることを示すと同時に、この言い方が後世まで続かなかった要因であると考えられる。

## 5. まとめ

以上考察してきたことをまとめると次のようになる。

- 室町期における「ヨムル」「カクル」などの下二段動詞は、四段動詞から派生してできたものである  
この「四段動詞の下二段派生」は前代からみられる現象であって、四段他動詞対下二段自動詞という自他対応形式をもとに、対応する自動詞をもたない四段他動詞が形態的にその不備を補おうとするという、一種の「自動詞化形式」である
- この下二段動詞は自動詞の延長上にある可能・受身・尊敬を表すものとして成立した後には尊敬用法への偏りが大きくなっていったと考えられる

問題点としては次のようなものが挙げられる。

(ア) 惟高妙安の抄物にある一段活用の（ようにみえる）「ヨメル」をどう解釈するか

(イ) 室町後期に尊敬用法へと偏っていったのはなぜか

(ア)の「ヨメル」は、例えば次のようなものである。

- 金一真乗ハコントヨメタソ、叢林ハキントヨメルソ (玉塵・十二 287・12)
- 仏ノ字ノ時ハ仏(フッ)桑トヨムルソ、又拂(ホッ)桑トモカイタソ、此時ハ桑トヨメルソ (詩学・五 66ウ6)

この問題に関しては村上(1976)でも触れてあるが、山田(1994)に、「ヨメル」は「ヨムル」の一段化ではなく存続の「り」がついたものであろうこと、「ヨメル」と「ヨムル」の間には意味上の交渉があったであろうこと、の二点が述べてある。確かに「ヨメル」を二段活用の一段化とすることは、この時期を考えるとやや早すぎるようでもあるが、存続の「り」が生き延びている可能性は、さらに低いのではないかと思う。「ヨムル」と「ヨメル」はほぼ同じ用法であるとされているので、出自を異にする別語と考えるよりも、同じように四段動詞から派生してできたものと考えたほうがよさそうである。

これは、湯沢(1929)に「連体形・已然形の如く使った例はまだ見当たらず」とあるように、用例の大部分が連用形に偏っていることと関係があるのかもしれない。連用形として多用された「ヨメ」の形が、終止・連体形を作り出す際に「ヨムル」でなく、「ヨメル」を作り出したと考えられようか。このように考えるならば、二段活用の一段化という現象

は、従來說かれている時期よりももう少し早かったのかもしれない。

(4)は非常に大きな問題であるが、今後の課題としておきたい。

この室町期における四段動詞の下二段派生という現象が、国語史上どのように位置づけられるのかについては、今回は触れることができなかった。自動詞化形式としての四段動詞の下二段派生は、平安鎌倉期より散発的に見られる現象であって、現在の可能動詞を以て最終的に文法現象として確立したのであろうと考えている。このような、可能動詞との関係も含めた国語史的な位置づけは、別稿に譲ることとしたいと思う。

## 注

- (1) 下二段「打つ」はその他平家物語、古今著聞集、源平盛衰記などにもみえることが、山田(1958)によって指摘されている。
- (2) 上代の下二段活用「知る」に関しては、これを自動詞と認めない説もある(釘貫1990など)。しかしながら、中古以降の下二段活用「知る」の使われ方は、自動詞であると考えられるので、ここではこの萬葉集の例も自動詞として解釈した。
- (3) 望月(1944)、西尾(1954)などは、これを四段他動詞から下二段自動詞が「派生」したとする。奥津(1967)は、どちらが派生したともいえず「両極化転形」であるととする。直接自他に触れたものではないが、木田(1988)は、四段活用よりも下二段活用のほうが古いという「下二段古形説」を唱えているので、「下二段自動詞→四段他動詞」という考え方なのかもしれない。
- (4) 「自動化」と「自動詞化」、「他動化」と「他動詞化」という用語は、ここでは使い分けたいと思う。「自動詞化」「他動詞化」とは、他動詞を自動詞へ、自動詞を他動詞へと変えることであるのに対し、「自動化」「他動化」とは、自動詞側、他動詞側へ意味を変えることである。つまり、自動化・他動化は必ずしも自動詞化・他動詞化を起こすものではなく、自動詞の自動化(行く→行かれる)、他動詞の他動化(読む→読ませる)ということも十分可能である。
- (5) 川端(1982)はこれを、「四段を下二段化することによって相(ヴォイス)を転換するという語法の認識」と述べる。また、此島(1973)は「活用の転換によって相を表す」としている。しかし、両者は「自動化」「他動化」を含めて述べているのであって、ここで私が述べている「自動詞化」とは厳密に言えば違う。これは、此島が自動詞の自動化例である「吹く」「笑ふ」などの例を挙げていることからもうかがえる。
- (6) この時期語彙的なものにとどまった理由は、やはり「る・らる」の存在のためであろうと思う。しかしながら、逆に「る・らる」とは違うニュアンスを含むものを表しうるという利点があったことも間違いないだろうと思う。このことは用例が武士の言葉に偏っている点からも推測でき、またそれがゆえに江戸期まで慣用的に残ったのであろうと考えられる。
  - ・さすかの武士も打てぬ顔(心中天の網島・上)
- (7) 四段動詞を下二段へと変える自動詞化形式が成立する可能性があるならば、当然その逆の現象、すなわち他動詞化も起こる可能性は十分に考えられるだろう。この点、細江(1928)は示唆的である。そこでは、古くは四段活用の一種であった活用形式が、二段活用を生み出して「中相」が発生した、「中相」とは可能・受身・使役の相であると述べてあるのである。この問題については、もう少し後の事情も考慮にいれて考察する必要があると思われるので、別の機会において述べたい

と思う。

- (8) 使用したテキストは次の通りである。

史記抄……岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成第一巻』

蒙求抄・毛詩抄……同『抄物資料集成第六巻』

玉塵抄……中田祝夫編『抄物大系別巻 玉塵抄』

詩学大成抄…柳田征司『詩学大成抄の国語学的研究 影印篇』

玉塵抄は巻一～巻十四の調査、詩学大成抄は村上（1976）の調査結果を引用した。

- (9) この表以外の数多くの抄物にも用例が存在する。これまで、笑雲清三抄古文真宝抄、四河入海、周易抄、幼学詩句、論語聞書、中興禅林風月集抄等でその存在が報告されている。（湯沢 1929、鈴木 1972、柳田 1974）

その他、雲章一慶講桃源瑞仙聞書百丈清規抄、綿谷周庵講景徐周麟聞書漢書列伝抄、日本書紀桃源抄、彦龍周興講古文真宝抄等にも用例を見いだすことができる。（『統抄物資料集成』第四・五・八・九巻）

- (10) 坂梨は「可能・受身・尊敬のどの意を表すのか意見の一致を見ない場合があるというのは確かだが、このことはそれほど重大な問題であろうか」とし、「助動詞ルルが受身・尊敬・自発・可能で用いられるように、この下二段動詞ももともとそれらの意を併せて表し得たものと言ってよいのではないか」と述べている。

- (11) 次のように、否定を伴わないで可能を表す例もいくらかは存する。

・此デ上ノ句モヨメタソ

（史記抄・七 25 オ 5）

・文字ハ讀ハヨムレトモ、義理ニ不知事カ多ソ

（百丈清規抄・一 1 オ 4）

・二首ハ数カ不定ソ、マツハ奇特ナルコトハ三十一字アルハヨウヨメタソ

（日本書紀桃源抄・下 28 オ 4）

- (12) 現在方言にこの下二段動詞が尊敬表現として残っている地方があり、当時の言い方を引き継いだものかと考えられる。広戸（1949）の記述を、次に引用する。

▲「石見に於ける可能動詞と同形の尊敬の動詞」

標準語の可能動詞として、書ケル（書く事が出来る）飛ベル、行ケル、居レルがあるが、石見に於ては、これを可能動詞としては用いず（一部に可能として併用する所もあるが）専ら尊敬の動詞として用いる。〈中略〉

先生ガ字ヲ書ケル……先生ガ字をお書きになる。

先生ガオレル……この場合は先生がいらっしゃるの意である。

その他「遊ベル、行ケル、取レル、死ネル、往ネル」等すべて尊敬の意味を持っている。

また、神鳥（1982）にも同趣の記述がある。

このように現在方言として残っている地方があることは、この言い方が当時の口語において、ある程度広く行われていることを示しているとも考えられる。

- (13) このように尊敬表現への傾斜が大きくなっていく中でも、否定表現の中では可能の意味が保たれている。

・字滅シソコネテヨメヌソ

（玉塵・四 475・1）

・此句モ含ノ字マメツツ正字ヲシラヌホトニヨメヌソ

（同・七 162・2）

このように否定表現の中で保持された可能の意味が、後に否定を伴わないでも可能を表現できるようになり、現在の可能動詞へ発展していったと考えられる。

- (補注) 漢文の引用に際しては次のとおりとした。

① ( ) は付訓など、{ } は送り仮名、返り点などを示す

②/ (スラッシュ) によって、訓点か漢字の右側にあるか左側にあるかを示す  
具体的には次のとおりである。

「契(カイノ) ……「契」の右側に「カイ」という傍訓がある

「如(シノコ) ……「如」の右下に「シ」という送り仮名があり、左下に二点がある

## 参考文献

- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形」『国語学』70  
神鳥武彦 (1982) 「広島県の方言」『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』国書刊行会  
川端善明 (1982) 「動詞活用史の展開」『講座日本語学 2 文法史』明治書院  
木田章義 (1988) 「活用形式の成立と上代特殊仮名遣」『国語国文』57-1  
釘貫亨 (1990) 「上代語動詞における自他对立形式の史的展開」『国語論究 2』明治書院  
—— (1991) 「古代国語における動詞派生形態の歴史の変遷について」『藤森ことば論集』清文堂  
此島正年 (1973) 『国語助動詞の研究』桜楓社  
坂梨隆三 (1969) 「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』46-11  
—— (1994) 「可能動詞の発達」『言語・情報・テキスト』VOL. 1 1993-1994  
佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版  
渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1  
鈴木博 (1972) 『周易抄の国語学的研究 研究篇』清文堂  
西尾寅弥 (1954) 「動詞の派生について——自他对立の型による」『国語学』17  
広戸惇 (1949) 『山陰方言の語法』島根新聞社  
細江逸記 (1928) 「我が国語の動詞の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』  
村上昭子 (1976) 『「玉塵抄」『詩学大成抄』における四段動詞および上一段動詞『見る』に対応する下一  
(二) 段動詞』『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社  
望月世教 (1944) 「国語動詞に於ける対立自他の語形に就いて」『国語学論集』岩波書店  
柳田征司 (1974) 「中興禅林風月集抄」『近代語研究第四集』武蔵野書院  
山田潔 (1994) 『「玉塵抄」の主格表現——『ノ』『ガ』の用法』『国語国文』63-7  
山田俊雄 (1958) 「平家物語の文法」『日本文法講座 4 解釈文法』明治書院  
湯沢幸吉郎 (1929) 『室町時代の言語研究』風間書房

## 〈付記〉

本稿は、国語学会平成6年度秋季大会(山口大学)での発表をもとに、いくらかの修正を加えたものである。発表席上ほかで色々貴重な御意見を頂いた諸先生方に、記して厚く感謝申し上げる。